

自然における主観性の展開と有機体 ヘーゲル『エンチュクロペディー』を中心として

小 林 裕 明

Zusammenfassung

Die doppelte Struktur des Sonnensystems, die im ‚Licht‘ in der ‚Physik‘ der Naturphilosophie der *Enzyklopädie(1830)* Hegels ist, vollendet sich im Organismus als die doppelte Struktur der Reflexion, das System der drei Schlüsse von der Natur. Dadurch hat der Organismus die Subjektivität, die das System des ‚Lichts‘ als ihr Werkzeug gebraucht und dadurch ‚das System der Schwere‘ strukturiert. Dies ist der systematische Sinn der drei Prozesse vom Organismus und die vollendete Gestalt der Natur. Diese Subjektivität aber ist nichts als der in die Natur gewohnte Geist. Der Geist wurzelt in die Natur, dadurch strukturiert er sie. Nur, diese in die Natur tief durchdrungene Kette der Subjektivität (oder des Lichts) besteht in den drei Schlüssen des ganzen Systems, genau genommen, in dem Urteil in die Natur und in den Geist in ihrem dritten Schluss. Im grossen erhabenen Kreis von den drei Welten der Natur, des Geistes und des Logischen kann die Natur in ihre Totalität kommen und vollendet werden, und zwar nicht nur die Natur, sondern auch der Geist selbst.

キーワード ヘーゲル 自然 主観性 生命 有機体

0. 序

ヘーゲルは、スピノザのような汎自然論にも、ライプニッツの諸モナドにも、あるいは、プラトンにおける単なる普遍的なアイデアの分有のみにも、アリストテレスにおける個物の統一のみにも留まることはない。ヘーゲルは、それら両者の統一を、「自然」、「精神」、「論理的なもの」という3重の世界の連関の上での個体的統一において構想する(小林[2],[3])¹⁾。

生命は、有機体として、自然の中で生きている。これを、ヘーゲルは、その「自然哲学」の最終部問として論じている。もとより、「主観性」は、精神の世界に属するものであるが、この有機体において、「主観性」が問題となる。また、この自然哲学の「有機体」に先行する「物理学」の領域の冒頭においても、「光」が、「外的な自己」として登場して来ている。本稿は、これらの自然における「精神的なもの」の出現と諸展開の構造を把握し、その意味を明らかにすることを目的とする。

1. 「物理的」世界と主観性

ヘーゲルの「自然哲学」は、『エンチクロペディー』の第2部であり、「自然」は、絶対的理念の相互外在の領域、外面性の領域を形成している。ここでは、その第2の領域である「物理学」(PHYSIK.)において、「主観性」が如何に現れてくるかを考察することにしたい。

1-1. 物理学における「魂的なもの」

自然の領域の完成は、自然哲学の第3部門である「有機体」の領域である。この領域の前提を「物理学」と共に形成しているのが、第1部門である「力学」である。自然の展開は、「空間と時間」の展開でもって始まり、それは、「物質」を結果する。この物質が「重さ」を克服する過程が、「力学」全体の展開である。それは、「太陽系」としてその諸契機の体系（「重さの体系」）を形成することを通して、「絶対的軽さ」である「光」へと移行する（小林[4],[5]）。こうして、「光」が、物理学の出発点となる。A. 「普遍的な個性の物理学」、B. 「特殊な個性の物理学」、C. 「総体的な個性の物理学」と展開されるこの物理学において、抽象的な主観性としての「光」が、如何に展開し「自由な個性」へと結果するかを見ていきたい。

(1) 魂的なものそのものとしての「光」

「光」の展開とその目標

「光」は、力学における太陽系のもとの内と外の統一そのものとして登場した。物理学において、これが、内の側面に即して展開される²⁾。そこで、ヘーゲルは、物理学の始めに、「光」を、再び「太陽系」へと展開させる。これは、かの力学における「重さの体系」に対する「光」の体系であり、ここに、太陽系の2重構造がある（小林[5]）。この光の「太陽系」の展開において、論理学の「本質論」における「反省諸規定」に対応して³⁾、「同一性」である光（太陽）が、月と彗星として「区別」され、地球として「根拠」(Grund)に至る。ここで、この「反省」の展開が、本来、2重の反省構造を形成していることが重要である。即ち、「同一性」の自己内反省（の総体性）は、他者への反省（「区別」）を介した自身への反省 = 自己内反省（「根拠」）であり、自己内で総体性を形成すると同時に、外的な総体性をも形成する⁴⁾。しかし、これは、まだ実現していない。従って、ここでは、まだ、この2つの総体性、即ち2つの「太陽系」は、直接に一致しているにすぎず、「絶対的な同一性」(E § 290 Zu.)へとは至っていない。それ故に、これらの媒介的統一が、「物理学」の展開の目標となる。

ヘーゲルは、物理学のB. 「特殊な個性」の最初に次のように補足している。

「自己性は、その諸規定を、まだ[ここ特殊な個性の始めにおいては]、自身においては、外に置いてしまっておらず、それに対して、総体的な個性は、諸天体の諸規定を自分自身において外に置いてしまっている；総体的な個性は、形態である。しかし、ここで、私たちは、やっと、形態の生成を持っている。」(E § 291 Zu.)

このように、「物理学」の最終段階であるC. 「総体的な個性」において初めて、個性は、「諸

天体の諸規定を自分自身において外に置いてしまっており、展開された2つの太陽系は、「形態」(GESTALT)として、統一に至っている。そこで、それまでの「物理学」の展開は、まず、「自己性が全体となること」(ebd.)を目指す⁵⁾。

「特殊な個性性」への移行

上の「光」とその太陽系は、A.a. 「自由な物理的諸物体」で展開される。これに続く b. 「諸元素」(空気、火、水、土; 4大元素)⁶⁾と c. 「元素過程」は、それぞれ、その「実存在」、「物」(Ding)である。即ち、「諸元素」は、光あるいは個体的物体に根拠付けられた実存在であり、そして、「元素過程」は、諸元素の統一としての「個体的な同一性」である (§ 286)。このような個体的なものそのものの「現象」、あるいは、「現象」としての個性性が、物理学の第2の領域を形成する B. 「特殊な個性性」である。

(2) 「特殊な個性性」における魂的なもの 「響き」

「特殊な個性性」の概念

この「特殊な個性性」は、「元素過程」において「相互外在する抽象的な諸元素の否定的な統一」として、従って、**実在的な個性性として** (§ 289) 定立された質料である。ここで、光は、「諸区別の魂」として、「物質そのものの自己性」となっている (E § 290 Zu.)。そこで、B. 「特殊な個性性」の領域は、全体としては、物質を前提として個体(物; 物質と光との統一)へと向かう観念化された諸実存在(4大元素)の働きの領域である。ここで示される「現象」は、そのような統一として、魂(的なもの)の宿ったものとして現われ出る。しかし、この個体的統一の背後には、「自由な個性性」さらには「有機体」において本来的には定立されるところのその魂自身である両契機間の相関⁷⁾としての諸実存在があり、そのもとで、「特殊な個性性」は、a. 「比重」、b. 「凝集」、c. 「響き」(DER KLANG)、d. 「熱」と展開される (§ 292)。次に、この内、特に、「響き」について考察することにした。

響き 「対自的に実存在しているもの」となった光

「響き」は、「特殊な個性性」(の比重と凝集)における「**内的な形式**」が、「自由」となり (§ 300)、「特殊な個性性」の領域において再び、「相互外が、自己内存在に対する対立において現象する」(E § 290 Zu.) ようになったものがある。ここで、「自己内存在によって、他の中心点、他の統一が定立され」(ebd.) ている⁸⁾。このことを考察しよう。

ヘーゲルは、「響きそれだけは、個性性の自己である、しかし、光のように抽象的な観念的なものではなく、いわば、機械論的な光であり、ただ、凝集における運動の時間としてのみ登場するものである」(E § 300 Zu. P1) と述べている。即ち、「響き」は、「質料的空間性の質料的時間性へと移行すること」 (§ 300) によって、「物体のそれ自身における内的な振動すること [Erzittern] としての一つの観念性」 (§ 299) となった個性性である。しかし、光が物理学の始元である「純粹同一性」であるのに対して、「響き」は、「**対自的に実存在しているもの**」 (§ 300) である。即ち、「響き」は、時間的形式の総体性として(「響きは、時間において自身を知らせるところのこのような

総体的な形式である」(ebd. Zu. P1))、物体の外面的(空間的)総体性と相関している「他の中心点」(E § 290 Zu.)「重さの体系」と相関する「光」の体系)であり、同時に、それらの相関そのものである。このように、「響き」は、質料の諸実存在とそれらの本質との交代(「響き」は、質料的な諸部分の特殊な相互外在とその否定されていることの交代である;)(§ 302))として、空間性と時間性の交代としての「振動」(波動)としてある光なのである。

ここで、物(Ding)における統一であったものが、判断として立てられている。しかも、この「響き」は、外なるものを「支配」する一なる総体性として(E § 300 Zu. P1)⁹⁾、現象として相関するものでありながら、言わば、観念的統一と実在的統一の相関そのものとして定立された「物」(自体)なのである¹⁰⁾。「響き」において、このような「内なるもの」が、一つの総体性として立てられ、そして、それが現象としては振動(波動)とされるのは興味深い。このようにして、響きは、振動(波動)として、力学的(機械論的)世界に作用する力(光)である。

(3)現実性としての「自由な総体性」への移行

このように、物理学の「特殊な個性性」において、特に「響き」として、物体の「魂的なもの」が登場する。しかし、これは、まだ、言わば、「内なるもの」と「外なるもの」の偶然的な結合にすぎない。「現象」における内容と形式の相関が、「特殊な個性性」において展開されたのだが、しかし、次に、「その自体が質料であるところの形式の当為」であるように、「普遍的なものとして、質料は、自身において規定されたものであることへと」(E § 308 Zu.)規定されなければならない。それ故に、次なる「形態」(GESTALT.)においては、概念の総体性が定立され、それが、「内から発展する諸契機としてあるところの形式諸規定の観念性として、質料に内在的である」(§ 308)ことによって、質料が、その概念に基づいて、自身を形態化する(~形式になる)。ここでは、このような「必然性」が、問題である。こうして、「自由な個性性」は、物理学の第3段階として、論理学においては本質論の「現実性」に対応する¹¹⁾。

1-2. ヘーゲルの「形態」論と「自由な個性性」の展開

それでは、「有機体」の直前の段階である C.「総体的な個性性」を考察したい。

(1)「自由な個性性」の概念

「自由な個性性」においては、物理学の始元に「光」として登場してきたところの「自身へと関係する無限な形式としての自己性」(§ 307)が、物理学の最終段階として、「自身を、それに従属させられた外面性において維持」(ebd.)しながら、「実在性」へと歩み入っている。即ち、「光」として普遍的な個性性が、(比重、凝集、音、熱の)特殊化から自身へと還帰したことによって、「総体的」な個性性となっており、その還帰によって、対自的に存在していることによって、「自由」な個性性となっている。こうして、個性性は、「自由にこの質料的なものを規定する**総体性**」(ebd.)としてある。

(2)「自由な個性性」の諸展開

ヘーゲルは、C.「自由な個性性」を、a.「形態」、b.「個体的物体の特殊化」、c.「化学的過程」

と展開させる (§ 309)。これらの展開は、有機体における 3 つの過程に対応するものでもあり、同時に¹²⁾、その中での「光」の働きが明確に示されている点で興味深いものである。

「形態化の原理」としての磁気

さて、「自由な個性性」は、さしあたって、「形態」である。「形態」の展開は、「形態化」であり、「個体化」である。しかも、これは、光の活動、即ち、「自身へと関係する無限な形式としての自己性」 (§ 307) の活動として定立された「物」の総体性である。

「形態」は、点、線、面の形態化と展開される (E § 311 Zu.)¹³⁾。「点」の形態は、「点性」(脆弱性) と「球体となる流動性」という 2 極においてあり、これらは、「無形態性としての形態」 (§ 311) である。この「脆弱なもの」と流動的なものという両原理の過程として (ebd. Zu. P1) 外化されたものが、「線」の形態、「磁気」(Magnetismus) である。この磁気が、「形態化の原理」 (§ 312)¹⁴⁾ である。しかも、両極において「展開された規定性」においてあり、ここに、ヘーゲルは、「概念」の推理連結を見る (vgl. ebd.)。こうして、磁気は、「主観の統一における区別の形式的な現存在」 (ebd. Zu. P1) とされる。

この磁気における「活動」の生産物、「磁気の統一」、両極の「中性」が初めて、「形態」である。これが、「結晶」(Kristall) である。このような「形態」は、「無限な形式と物質性の中性」 (E § 315 Zu. P1) であり、相互に必然的な両極である磁気においてはなかった合目的性がここにある。即ち、それは、「形式の原理」によって内から規定されている個物である (ebd.)。このような個体化によって、「力学」から「物理学」への移行のように、「物理学的な特殊化」へと移行がなされる。これが、b. 「個体的物体の特殊化」である。

個体的物体の特殊化と電気

「個体的物体の特殊化」は、光(と物質との直接的統一)と物の相関における 4 大元素の働きであり、4 大元素は、光を前提としながら物を目指す(個体的物体は 4 元素の統一である)のである。こうして、ここで、4 大元素との関係において、「色」、「香り」そして「味」、「電気」が展開される¹⁵⁾。その結果、色が「形態」と光との関係として登場するのに対して、「電気」においては、光が、物体の「**実在的な自己性**」 (§ 323) として現れてくる。この光は、「それぞれのものにおいて**差別的な光**」 (ebd.) である。勿論、光そのものは「無差別な光」 (§ 324) であるが、それが、電気的な両極の「区別の止揚」 (ebd.) として生じ、このような過程全体が、「**差別的な光**」なのである。こうして、「電気は、自分自身と差別的であるところの無限な形式であり、そして、このような諸差別の統一である。」 (ebd. Zu.)。このような電気における「光」の統一は、「形態」における「形態」からの自由を示しており、磁気が形態化の原理であるのに対して、(時間が空間形成の否定性として出現したように) 電気はその対自的活動性である¹⁶⁾。それ故に、電気において、両極は、それだけで存在する。従って、磁気が空間的形態形成の原理であるならば、電気は時間的形態形成 (= 過程) の原理であろう。こうして、次に、磁気と電気の統一、「形態」(磁気) と、自己性である「電気」との統一として、「化学的過程」が、登場する¹⁷⁾。

化学的過程

対立の両極は、「磁気」において形態から分離できないものであり、そして、「電気」においても分離した極へと高められはしたが、まだ観念的なものであった。この対立の両極が、化学的過程においては、「物質的特殊化」(E § 324 Zu. P10)において定立され、「**化学的に差別的な物体**」 (§ 309)とその関係となっている。このような実在性は、「光の身体」 (§ 325)であり、必然的に、その諸契機は過程へと入る。このように、「抽象的な純粋な自己性、光原理」(ebd.)が「過程」へと移行することによって、「光」は、その「実在性」において(一応の)実現に至っている。それ故に、これらの過程の結果として生み出される総体性、形態は、「実存在から形成されたもの」となっており(これが有機体の自己形態形成へと繋がる)、化学的過程は、「物体をその諸契機として持っているところの個性性、自身を総体性として実在化するもの」 (§ 309)である。

化学的過程においては、「特殊な諸物体全体」がその諸契機となっていることそのものが、その個性性となっている (§ 326)。従って、化学的過程において、「区別されたものを同一的に定立すること」と「差別化すること」がその規定をなす。この運動において、「化学的過程は、確かに、一般に、**生命**である」 (§ 335)が、その同一化と差別化は相互に「中断」している(目的的過程になっていない)ため、まだ、生命ではない¹⁸⁾。だが、化学的過程において、「直接的な諸前提」である「無関心的に存立する物的なもの」が「否定されたもの」あるいは「個性性の契機」として定立される (§ 336)ことによって、「非有機的自然は、自分自身を無化し、そして、無限な形式[「純粋な没物的な個性性」(ebd. Zu.)]のみを、その真理として示す」(ebd. Zu.)。その結果、次に、「有機体」が、「持続するものとなされた化学的過程」(E § 335 Zu.)として登場することになる¹⁹⁾。

1-3. 「有機体」への移行と「光」の自己還帰

冒頭で述べたように、物理学の展開は、光の太陽系と重さの太陽系との展開であった。当初、直接的に一致していた両者は、「特殊な個性性」において2つの総体性の(反省的な)相関として定立され、次に、この「自由な総体性」において統一されることによって、外的な総体性は内的な総体性の顕示としての意味を持っている。形態においては、(必然性としての)個性性が、物的形式において(実体)、4大元素として顕示されており、色・香り・味・電気においては、4大元素の働きに媒介されて、物体が、個性性と相関していた。最後に、化学的過程においては、個性性に媒介されて、4大元素が、諸物体と相関している。即ち、それぞれの物体が、或る元素という規定を持ち、相互に関連している。

このような個性性は、物理学の領域において、光として登場したものである。しかし、その展開の中では、これは異なった意味を持っている。これらの相関において媒介の働きをしてきた必然性としてのこの個性性は、もともと本来的には、有機体において登場してくるべき「主観性」である。個性性は、自由な個性性として花咲かせ、この必然的なものが、自由となることによって有機体の主観性となる。この主観性は、それだけでそのものとして定立された光の自己還帰である²⁰⁾。しかし、これこそが、かの光の太陽系を介して重さの太陽系を形成した主体な

のであり、この働きが、「有機体」において本来的に登場する。

2. 有機体の概念とその展開

有機体が展開される「有機的物理学」は、自然哲学の第3部門である。この有機的物理学は、A.「地質学的自然」、B.「植物的自然」、C.「動物的有機体」と区分されている。まず、「有機体」の概念から考察していこう。

2-1. 有機体の概念

「有機的物理学」の最初に、ヘーゲルは、まず、「有機体」の概念を次のように述べている。

「物体の實在的総体性は、個体性が特殊性あるいは有限性へと規定され、そして、この同じものを否定し、そして、自身へと還帰し、過程の最後において、始元へと再び自身を回復させるという無限な過程としては、これと共に、自然の第1の観念性への高揚である、しかし、それは、**満たされた**、そして、本質的に、自身へと関係する**否定的統一**、**自的**そして**主観的統一**として生じた。従って、理念は、実存在へと、さしあたって、直接的な実存在、**生命**へとなってしまっている。」(GW20. §. 337)

このように、自然は、「有機体」において、その「第1の観念性」へまで到達した。この「自然の第1の観念性」は、「生命の理念」を意味している。まず、このことから考察を始めたい。

(1)「生命の理念」と自然における生命

ヘーゲルは、『論理学』「理念」の「生命」において、(外面性から区別された概念に対する)生命あるものの「客観性」が「有機体」であると述べている²¹⁾。つまり、「有機体」は、生命そのものではない。自然哲学において展開されている「有機的物理学」の対象についても、「自然の生命として、**存立の外面性**へと投げ出されており非有機的な自然においてその**制約**を持っている限りでの生命」(GW12 das Leben P2)と、「生命」の導入部において言及されている。そして、このような生命は、「外面性が自身へと至ってしまいそして自身を主観性へと止揚することによってその外面性から到達されるところの最も高い段階として現象する」(ebd.)とされる。これが、ここで考察の対象である「有機体」であるのだが、このことが、同時に、「自然の限界」を示している²²⁾。即ち、自然における「生命」の理念への還帰は、「生命の理念」への還帰であって、自らを自然として外化した「絶対的理念」への還帰ではなく、従って、自然のその本来の根源的始元への還帰ではない。この自然の「限界」によって、自然は、「精神」へと移行する。

このように、自然哲学においては、有機体として、「**存立の外面性**へと投げ出されており非有機的な自然においてその**制約**を持っている限りでの生命」が展開される。このような「有機体」としての生命の規定についてさらに考察したい。

(2)「概念」の実現としての有機体

上のように、自然は、「生命」の理念へまで到達した。それは、「**満たされた**、そして、本質的

に、自身へと関係する**否定的統一**、**自己的**そして**主観的統一**として生じた」 (§ 337) のであり、「物体の實在的総体性は、個性が特殊性あるいは有限性へと規定され、そして、この同じものを否定し、そして、自身へと還帰し、過程の最後において、始元へと再び自身を回復させるという無限な過程」(ebd.)である(vgl. § 336 auch.)。即ち、有機体は、「實在性へと至ったところの概念」(E § 336 Zu.)である。このように、ヘーゲルは、力学を存在論、物理学を本質論、有機的物理学を概念論に対応させているのであるが(Zu. vor E § 275)、自然における概念の出現は、有機体という理念において現れて来る。

(3)「主観性」としての生命と「生命あるもの」としての有機体

しかし、この「有機体」において、本来的に、「主観性」がある²³⁾。主観性とは、他者において自身に留まっていることであるが、これは、概念が、その2重の反省構造、円環の円環構造において、自身を他者へと差し入れ外的な総体性を形成しながら、自分自身においても自己内反省していることを意味している。生命においては、これが、有機体という他者(客観)へと主観が自身を差し入れる形で実現している(「それに応じて有機的なものが**個別的なもの**としてあるところの**主観性**は、自身を、**客観的な有機体**、**相互から区別されている**ところの諸部分へと分枝化する身体[Leib]としての**形態**へと展開させる。」 (§ 343)²⁴⁾。そして、このような全体が、「生命あるもの」としての有機体である。それでは、この有機体の諸展開を見ていきたい。

2-2. 有機体の展開 鉱物と植物

ヘーゲルは、有機体を、「**地質学的有機体**」(der *geologische* Organismus)、「**植物的有機体**」(der *vegetabilische*)、「**動物学的有機体**」(der *animalische* Organismus)と展開する (§ 337)²⁵⁾。そこで、まず、この展開の意味するところを考察したい。

(1)「有機体」の諸展開

ヘーゲルは、「地質学的有機体」の最初の節である § 338 において、「第1の有機体は、それがさしあたって直接的な有機体あるいは**即自的に**存在する有機体として規定されている限りですでに、**生命あるもの**としては実存在していない」 (§ 338) としながら、自然における生命の本質を述べている。

生命は、その本来の運動を、「主観そして過程として」、「自身を自身と**媒介する運動**」(ebd.)とするものである。この本来的運動は、植物(特)-動物(普)-鉱物(個)という3重の推論の第3の推論において表現される。この図式は、動物の主観的普遍性が、自身を、植物と鉱物へと根源分割し、それにおいて自ら両者を統一していることを意味しているが、これは、「主観的な生命」(植物)から見ると、「自身をその**前提**へとなすこと、自身にそのように**直接性**のあり方を与えること」(ebd.)であり(上の結論命題、植物(特)-鉱物(個))、「自身に直接性においてその生命の制約と外的な存立することを**対抗**させること」(ebd.)を意味している。

自然における理念の展開において「有機体」が出現することも、このような判断である(「主観的生命性とさらには精神的な生命性への自身においてある自然理念の**内化**は、自身とかの没過

程的直接性への判断である」(ebd.))。しかし、この判断は、自然における 3 重の推論の先行する 2 つの推論を前提として行われている。即ち、自然は、第 1 の推論：動物(個)-鉱物(普)-植物(特)と第 2 の推論：鉱物(普)-植物(個)-動物(特)²⁶⁾を、それぞれ、「力学」の総体性、「物理学」の総体性として、自身の前提として形成してきたのであり、それらが、それらの媒語であり自然における本来的推論である第 3 の推論：植物(特)-動物(普)-鉱物(個)において統一されることになる²⁷⁾。

このような自然における展開が、「有機体」の中で繰り返されたのが、鉱物、植物、動物の有機体の展開である。これらは、それぞれ、上のように、鉱物：動物(個)-鉱物(普)-植物(特)、植物：鉱物(普)-植物(個)-動物(特)、動物：植物(特)-動物(普)-鉱物(個)という推論図式²⁸⁾を持っており、それぞれの有機体の内部では、形態化(個体化)の過程、同化の過程、類の過程という 3 つの過程を形成する。

(2)「地質学的有機体」とその展開

それでは、「地質学的有機体」の展開から、「有機体」の展開を見ていきたい。

「形態」、「生命の普遍的像」としての地質学的有機体

「有機体」は、さしあたって、「地質学的有機体」であり、それは、「**形態**、**生命の普遍的像**」(§ 337)と規定される。そして、これは、上の§ 338 において、次のように言われている。

「このような、**主観的な総体性**によって自身に前提された直接的な総体性は、ただ、有機体の**形態**にすぎない、**個体的物体の普遍的な体系**としての**地球体**[*Erdkörper*]である。」(GW20. §. 338.)

まず、このことの意味を「地質学的有機体」の文脈において考察したい。地質学的有機体は、「ただ直接的にすぎない理念としての生命」(§ 337)である。しかし、これは、「非-生命」であり、物理学の展開によって定立された総体性、即ち、力学の総体性と物理学の総体性との統一としての総体性である。この総体性は、上で見たように、本来的には、その第 3 段階である動物の有機体を意味している。しかし、これが、ここで、(現存在の推論としての)第 1 の推論：動物(個)-鉱物(特)-植物(普)の推論図式に従って、その外面性に即して登場して来ている。即ち、個別的なものとして前提された生命(動物)の現存在である。従って、「有機体」の第 1 の段階である「地質学的有機体」は、「形態」、「生命の普遍的像」として現れてくるのである。これが、「地球体」であり²⁹⁾、このことが、上の§ 338 の引用の意味である。

「地質学的有機体」における諸過程

この地球体は、「普遍的」有機体である。さらに、「地質学的有機体」の展開において、この「地球体」が分化され、諸大陸、そして、諸鉱物と展開されていく³⁰⁾。このような「地質学的有機体」の展開は、「個体的な形態化」(§ 343)の展開であるが、しかし、「地質学的有機体」は、「観念性のない形態化することの単なる体系」(ebd. Zu.)であるとされる。即ち、「地質学的有機体」の展開は、確かに、「個体的な形態化」であるが、それは、地球体という「地質学的有機体」全体の体系において、個体化・形態化される当のものの外からの諸威力によって、個体化・形態化がなさ

れるのである。

それぞれの「有機体」の本来の展開は、形態化(個体化)の過程、同化の過程、類の過程であるが、植物的有機体や動物有機体と異なり、「地質学的有機体」においては、これらの諸過程において十分に展開されているとはいえない(§ 338 から § 340 までの展開は、形態化・個体化の過程と言えらるゝとしても、同化と類の過程は、あるとしても、§ 341 と § 342 にわずかに触れられているに留まるだろう)。これは、「地質学的有機体」において、それらの過程が、一つの過程において同時に展開されているものであるからであろう。即ち、地球体、諸大陸、諸鉱物という展開は、形態化・個体化の過程であると同時に、他の諸威力を受け入れる同化の過程であり、これは、(ここでそもそも個体からの個体の再生ではないが、)同時に、個体を生み出す類の過程でもあるということである³¹⁾。

「地質学的有機体」における主観性と「生命を入れられた有機体」への移行

しかし、このような外的な諸威力の中心点で「生命性」が輝くことになる(§ 341)。上のような展開・分化の結果、「地質学的有機体」は、「主観性」へと到達する。上の「形態化」の結果である生命の「結晶」(ebd.)は、「死んでいるもの」であるが、分化の結果として、自身へと還帰した「地球体」として、(空気、火、水、土の元素過程、「気象学的過程」によって、)「生命性」(ebd.)という中心となる。これは、還帰したものとして、「**点的なそして一時的な生命性**」(ebd.)であり、まだ、「客観的有機体」をその外部に持っているが、このような分離が、「**生命を入れられた [belebten] 有機体**」(§ 342)へと止揚される。これが、「植物的有機体」である。

(3)「植物的有機体」とその展開

それでは、この「植物的有機体」とその展開を見ていこう。

「植物的有機体」の概念

植物的有機体が初めて、「主観的な生命性」、「生命あるもの」である(§ 337)。即ち、「植物的有機体」において、「主観性」が、「それに応じて有機的なものが**個別的なもの**としてある」(§ 343)とされる。この「主観性」の登場が、植物的有機体を特徴付けるものである。それによって、植物は、「自身を、**客観的な有機体、相互から区別されている**ところの諸部分へと分枝化する身体[Leib]としての**形態**へと展開させる」(§ 343)。このような「展開」は、本来、概念の展開に応じるものであり(点(種)、線(茎)、面(枝)、そして丸(花))、有機体は、自身をその諸契機へと区別しながら自身へと還帰していることによって一つの「**個別的なもの**」(ebd.)となっている。

しかし、植物は、まだ、「特殊な形式的な主観性」(§ 337)、「**ただやっとう直接的にすぎない主観的な生命性**」(§ 343)であり、あるいは、植物において、「客観的な有機体とその主観性は、まだ、直接に同一的である」(ebd.)である。従って、植物においては、まだ、(動物におけるような)「有機体」本来の概念的展開は実現していない。それによって、「植物的主観の分枝化と自己保存の過程は、自己外へ至ること、そして、幾つかの諸個体へと崩壊すること」(ebd.)である。即ち、植物の成長は、蕾、枝などの諸部分へとバラバラになることである。これらの諸部分は、それ

それ全体であり、それらの差別は、「表面的な**変容**[Metamorphose]」(ebd.)にすぎない。そのため、諸部分から容易にまた全体へと移行しうる³²⁾。植物は、本来概念諸分枝である諸部分へと崩壊しており、植物の形態化過程において、それぞれの諸部分が、動物のようにもともと総体性として展開するのではなく、バラバラに展開され、出現あるいは消滅する。

植物的有機体は、(反省の推論である)鉱物(普)-植物(個)-動物(特)の推論図式を持っている。このため、植物は、鉱物即ち大地を前提として、反省的に、動物へと向かう。植物は、言わば、悪無限的に成長する特殊な有機体であり、そして、その諸部分もまた、全体から切り離されても、そのまま全体になるべく成長するバラバラの特殊性である。これが、すでに個別へと至っている動物の有機体との違いである。「分枝化された身体は、植物のもとで、従って、まだ、魂の客観性ではない；植物は、**自身にとってまだ客観的でさえない**」(E § 344 Zu. P1)。植物は、大地と光との間にある特殊性、あるいは、非有機的自然と類との間にある特殊性である。あるいは、植物は、根と蕾を繋ぐ茎である³³⁾。

植物とその自己としての「光」

・植物の自己の探究

「光」は抽象的な「主観性」である。上のように、植物は、まだ真には「主観性」を持たず「個別的なもの」ではない。従って、植物は、その自己を、その外なる「光」として探究する(ebd.)。植物は、「反省の段階」(E § 337 Zu. P5)であり、その本来の「自己」を、光として、自身の外に持っている。植物の成長あるいは運動の原理は、植物の外にある。「植物は、むしろ、光から、そのそれに外的な自己としての光から引きちぎられ、諸個体の多性へと枝分かれしながら、光に向かって巻き登る」(§ 347)のである。

・植物における光としての「花」

こうして、植物は、芽(点)、気質繊維(線)、葉(面)と成長する。しかし、その終着点、「花」(表面→立体)において、再び、「自己」(光)と出会う³⁴⁾。「花」は、植物におけるその自己(光)との同化であり(E § 348 Zu. P1)、植物は、「花」において、「光」を受け、そして、それを、自らに「固有な自己」として、即ち、「色」として生産する(§ 348)。このように、「花」は、植物における分裂、その外面性と内面性との接点、媒語である。それ故に、「花」は、植物における再生の契機として、植物-動物-鉱物の推論図式を持つ動物的なものである。しかし、植物は、その自己還帰において、「自己」を、「外面性に対する内的な主観的な普遍性において」は結果として持つことはなく、それ故に「自己感情」へも至ることはない(§ 347)。これらの事情は³⁵⁾、植物は、「花」において、いわば外的に「感情」を持つことを意味している。植物は、「光」に触れることによって、「自己」を外に輝かせる³⁶⁾。

こうして、花は、(悪)無限的に成長しようとする植物の結び目である(E § 350 Zu. P1)。このように、植物は、鉱物(普)-植物(個)-動物(特)として、「反省の段階」の有機体として、大地(根)と花(光)との間を繋ぐあるいはそれらの間で引き裂かれる「茎」である。このような植物のあり方を、

ヘーゲルは、「中和の領域」、「水の領域」(E § 337 Zu.)とも呼んでいる。植物は、自らを引き裂く「非有機的自然」の諸威力に「無力」な中間なのである。

「植物的有機体」における諸過程のあり方

植物の過程も、「有機体」の3つの過程、形態化、同化、類の過程を持っており(「生命性であるところの過程は、それが唯一の過程であると同じ程度に、諸過程の3性へと自身をバラバラになす」(§. 217-220.)) (§ 346);これは「生命」の理念の展開である)、ヘーゲルも、それを、§ 346-8と展開している。しかし、ヘーゲルは、「**個別的個体の形態化と再生の過程は、このようなあり方で、類の過程と一致し、そして、新たな諸個体の多年性の生産することである**」(§ 344)、あるいは、「**形態化過程と同化過程は、すでに、それ自身、再生、新たな固体の生産である**」(§ 348)と述べている。このような「形態化の過程」と「再生の過程」と「類の過程」の一致は、植物の、枝、蕾への「形態化」が、即ち、新たな個体を作り出す「再生」、類の過程でもあることを意味しており、また、これは、自己の新たな部分的個体の再生において自己を維持する「再生」でもある。植物の形態化は、「根源的な同質性」の「再生」(§ 345)なのである。

2-3. 「動物有機体」への移行

しかし、植物の過程の全体において、概念においては、「さしあたって諸個体としてあるところの諸部分を、また、媒介に属しそして媒介における一時的な諸契機としても、従って、植物的生命の**直接的個体性と相互外**を、止揚されたものとして示すこと」(§ 349)、即ち、「自分自身と一致する個体性」(ebd.)、本来的な「主観性」が定立されている。このことは、もっぱら、再生の過程においてであろう。動物は、いわば、他から独立しあるいは他を含むことによって自由になった花である(vgl. E § 350 Zu. P1.)。

これをもって、「植物的有機体」は、「動物有機体」へと移行する。それでは、次に、章を改めて、「動物有機体」を主にその主観性の実現に限定して論じていきたい。

3. 「動物有機体」と自然の中の精神

「動物有機体」が初めて、「個別的具体的主観性」(§ 337)を持つ。ここでは、この本来的な有機体である動物有機体、そしてその精神との関係を自然全体の観点から考察していきたい。

3-1. 「動物有機体」の概念

ヘーゲルは、「動物」の概念を、C. 「動物有機体」の冒頭において(§ 350)、上で見た「有機体」一般の概念と同様のことを述べ、それを、「**動物的本性**」(ebd.)としている(vgl. § 337 auch.)。「動物」は、植物(特)-動物(普)-鉱物(個)の推論図式を持っており、ここで、「動物」の普遍性は、「**主観的普遍性**」(ebd.)となっている。これが、有機体本来の推論図式であり、それがここで実現しているのである。「自然」は、この動物において、その最高の形式を獲得した。

(1)自己運動

この「動物的有機体」の特質として、「自己運動」と「自己感情」が挙げられる。ヘーゲルは、§ 351において、「光」との類比において、動物の「主観性」を、「光が重さから救い出された観念性であるように、実在的な外面性から取り出されたものとして、内的な偶然に応じて、自分自身から、自身を場所へと規定するところの自由な時間」(§ 351)³⁷⁾と規定する。

光は、抽象的な主観性として、(機械論の3重の推論である)「重さの体系」においてその一つの契機として実在化されていた「時間」が「光」への移行において一つの総体性として「自由」になったものであり³⁸⁾、この意味で、「光」は、「自由な時間」である。しかし、そうでありながら、動物の主観性は、(自己還帰した「光」、自覚的な「光」として、)「自分自身から、自身を場所へと規定する」ことによって自身の場所(位置)を自己規定する。こうして、動物は、動く³⁹⁾。

(2)「自己感情」と「光」の自己還帰

さらに、動物は、「感情」を持つ。これは、「規定性において直接に普遍的な単純に自身の許に留まっているそして自身を保持する個性」(§ 351)である「規定されていることの実在する観念性」(ebd.)である。植物が、「光」を探究する有機体であったのに対して、動物にとって、「光」は、もはや、そのような探究する対象ではない(「動物において、光は、自分自身を見出した」(E § 350 Zu.; vgl. E § 362 Zu. P2 auch))。動物の主観性は、むしろ、自己還帰した光である。このような「自己に対しているところの自己、両者を通り抜けるところの、諸区別の実在する統一」(E § 350 Zu.)として、動物は、「自己感情」を持っている。こうして、光は、外化され一面的となった自己感情である。

3-2. 「動物的有機体」における推論図式と自然

述べたように、「動物的有機体」は、(必然性の推論である)植物(特)-動物(普)-鉱物(個)という推論図式に従う。この推論図式が、「有機体」における本来の推論図式である。そして、この推論図式において、さらに、地質学的有機体と植物的有機体と同様に、3つの過程を、3つの推論として持っている(§ 352)。この、「形態」の過程、「同化」の過程、「類の過程」を、ヘーゲルは、この「動物的有機体」においては、(表題においても区分しながら; 第一版は除く)詳細に論じている。

これらの諸過程は、動物において初めて本来的な連関を持っている。それは、「類の過程」が、動物的有機体において初めて本来的である(E 348 Zu.)ことによる。「類の過程」が、動物の本来的過程として動物の諸過程を支配しそれらを構造化する。これによって、動物の諸過程において、形態の質的構造化と同化の量的構造化が、「類の過程」における限定的構造において統一されている。動物は、有機体の最高段階であると同時に、自然における最高段階である。動物における諸過程は、自然における諸推論全体に他ならない。動物は、まさに、「小宇宙」(E § 350 Zu. P1)なのである。

ヘーゲルは、自己感情を同化の過程において展開する(§ 357)。それ故に、「類の過程」においても自己感情が登場するとしても、「類の過程」は、主観性そのものにおける過程として、むし

る自我に近いものが出現する過程と言える。それは内と外のただ直接的な統一ではない。これ故に、動物は、自ら「死」へと赴きもする (§ 375)。しかし、ヘーゲルによれば、動物は自己感情に留まり自我へとは至らない (E § 24 Zu. u.a.)。「自己感情」が動物における最高の主観性である。本来的精神の存在である人間の自我は、自然においては、特に「類の過程」において完成された有機体としてのその全体において初めて出現すると言えよう⁴⁰⁾。

それでは、最後に、自然へと射し入り宿りこんだ精神としての主観性の自然における働きについて考察したい。

3-3. 有機体の主観性と精神

(1) 宿り込んだ精神としての有機体の主観性

有機体の主観性は、自然の中に差し入れられた精神である⁴¹⁾。この有機体の主観性は、動物の自己感情である（「しかし、とりわけ、感情を、規定性において直接に普遍的な単純に自身の許に留まっているそして自身を保持する個性として持っている；規定されていることの実存在する観念性。」 (§ 351)）。生命は、主観性をその中心に置き、その物理学的総体性(形式)と力学的総体性(物質)とを統一することによって、自身を有機体へと客観化する。それと同時に、この主観性は、有機体の中で、自己感情として規定されている(人間においてはさらにこの自己感情の中心に自我が輝いている)。「生命あるもの」において、精神の世界におけるこのような主観性の連鎖が入り込んでいる⁴²⁾。

(2) 有機体の主観性の道具としての光

さて、光は、外面的な自己であり、外なるものとなった主観性であった。この光を主観性との関係において論じたい。

光と4大元素の働き

4大元素は、物質の内と外の統一(限界)である光を通して、その内側から⁴³⁾世界を規定する力である。見たように、この4大元素を介して、「自由な個性性」において、物体と主観性との相関が、色、香り、味として定立された。これと同じ働きを、動物は、それ自身の過程の中に持っている。即ち、(理論的過程としての)「同化」の過程である。これによって、動物は、色、香り、味などの感覚を持っている。動物の感覚において、4大元素の働きがある。このとき、光そのものは、主観を物的に規定する直接的自己感情であり、これは、感覚としては触覚である。

主観性の道具としての光

動物は、「見る」(vgl. E § 362 Zu. P2)ものであり、このことにおいて、光は自身に還帰している。しかし、この感官において規定される特殊的規定は、自身を止揚しなければならない。この衝動は、本能として、その内容を持っている。同化の過程においては、光は、類を目指す特殊的(種的)な無限進行を行なうにすぎない。しかし、この無限進行が、光の体系を結果する⁴⁴⁾。この光の体系が、諸感官や諸本能的行動範型である。この体系は、類の主観性に奉仕するものとして位置付けられる。この本来的主観性における過程、「類の過程」における再生は、主観性が、個

体的な光を介して自身を物体化するプロセスである。即ち、主観性が、氣象学的過程や化学的過程をコントロールすることによって、物質的世界において自身を物的に実現する受動的かつ能動的過程である。ここにおいて、有機体は、光の体系と重さの体系の直接的統一としての形態であるだけでなく、光の体系によって重さの体系を支配するものとなっている。個性は、このような自らを道具として立てたところの主観性なのである。

このように、精神は、自然の中に根を降ろすことによって、自然を構造化しているのであり、そして、このような形で、冒頭に論じた太陽系の2重構造、2重の反省構造は、自然の3重の推論体系として自然において実現しているのである。

4. 結論

有機体は、その「類の過程」によって、自ら「死」に至る⁴⁵⁾。これによって、「精神」が登場する(§ 376)。「類の過程」は、自然における主観性本来の過程である。しかし、「類」は、個体において実現しているとしても、自然においては、この「類」が個体化しているわけではない。このような「類」は、やはり、自然的なものに留まるのである。しかし、本来的な「精神」は、このような「類」を越えて、自らを個体化する(小林[1])。「人間」は、精神において個体的なものであり、従って、人間の魂は、死を超えて自身を維持する。勿論、人間も自然においては或る有機的なものである。即ち、人間の魂も、動物と同じ様に、個体的な光の総体性を介して物質的総体性を形成・維持することによって、自然に宿り込み、動物的自己感情を獲得している。しかし、動物的自己感情は、個体的なものとしては、動物の精神的没個性によって、言わば、自然における精神的個性あるいは「自我」の模造、あるいは、自然という洗濯機によって掻き回された結果としての中心のごときであり、自発的中心ではない。従って、動物的自己感情に留まることは人間のあり方ではない。人間は、自然にあっても、動物的自己感情を克服し、自ら止揚することによって、人間なのである。

このように、理念は、(自ら根源分割した)自然の世界と精神の世界の区別において、主観性(あるいは光)の連鎖を自然へと深く根を降ろさせることによって、自然を構造化し、諸々の有機体を存立させると共に、その総体性を形成させる。そして、このような自然と精神と論理的なものの世界の壮大な円環の中で、自然のみでなく、精神自身の完成もなさしめるのである。これが、冒頭に掲げた3重の推論としてのヘーゲルの哲学体系の意味である。

< 註 >

1) 【主文献】(本文・註において、必要に応じて以下の略号も使用する。)

E : *Werke*, E.Moldenhauer, K.M.Michel (Red.), Bd.8-10.

GW[1-22] : *Gesammelte Werke*, Rheinisch Westfälische Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), Hamburg, Felix Meiner, Bd.1-22.

なお、P[0-9]+は、段落番号、An.は Anmerkung、Zu.は Eにおける Zusatzを示す。そして、ただの{番号}は、GW20における節番号である。本稿では基本的にこの『エンチュクロペディー』第三版に従っている。また加藤尚武氏の邦訳と Petry の英訳も適宜参照させていただいた。

Karl-Heinz Ilting, Hegels Philosophie des Organischen, in: Petry, Spekulation und Erfahrung II,2 *Hegel und die Naturwissenschaften*, 1987

Vittorio Hösle, Pflanze und Tier, in: a.a.O.

D.Wandschneider, Anfänge des Seelischen in der Natur in der Deutung der hegelischen Naturphilosophie und in systemtheoretischer Rekonstruktion, in: a.a.O.

また、関連する筆者の論文については以下の略号を用いる。

- [1]小林,『Hegelの Anthropologieにおける Leib, Seele, Geistの考察』, 広島大学文学部西洋哲学研究室編, 『シンポジオン』復刊 47号, 2002.3
 - [2]小林,『ヘーゲルにおける「学の自覚」の構造』, 広島大学文学部西洋哲学研究室編, a.a.O.復刊 49号, 2004.3
 - [3]小林,『ヘーゲル論理学における存在と本質の位置付け』, 広島哲学会編, 『哲学』56集, 2004.10
 - [4]小林,『空間・時間と物質について ヘーゲルの物体論』, 新潟大学現代社会文化研究科編, 『現代社会文化研究』第 35号, 2006.3
 - [5]小林,『ヘーゲルの「物体」概念と「光」の意味』, 新潟大学現代社会文化研究科編, a.a.O.第 37号 2006.12
- 2) 光は、いわば、内の世界と外の世界の境界(限界)である。
 - 3) 「物理学」は、論理学の「本質論」に対応している(Zusatz vor E § 275)。
 - 4) この2重の反省構造の意味は、後で、有機体の「主観性」として考察する。
 - 5) これが「響き」である(「このような満たされた自己性を、私たちは、響きとして見るだろう。」(E § 291 Zu.))。そして、その上で、「物質的なものとの統一において、響きは、形態である。」(ebd.)
 - 6) この諸元素(4大元素)の展開は、空間の点、線、面、(表面)の展開と同様にしばしば出現する。後者が、まさに、(形態などで現れる)空間的展開であるのに対して、前者は、主に、その対自的展開、時間的展開において出現する。
 - 7) B.「特殊な個性性」は、論理学の「本質論」においては特に「反省の相関」に関連する。そして、ヘーゲルが自然哲学の始めに規定している「II. 特殊性の規定においてある。その結果、実在性は、内在的な形式規定と共に、そして、その実在する差異において定立されている。その自己内存在が自然的な個性性であるところの反省の相関、**物理学**」 (§ 252)は、特にこの領域に関連していよう。また、「凝集は、相互を止揚する諸規定の交代、物体のそれ自身にける内的な振動することとしての一つの観念性」となるが、これが、「凝集の単なる観念的な止揚すること」としての「実在する観念性」 (§ 291)としての「響き」(Klang)である。なお、「重さが被るところの規定性は、a.抽象的に単純な規定性であり、そして、それと共に、それにおける単に量的な関係としてある、**比重**; b.質料的な諸部分の関係の特殊なあり方、**凝集**である。c.質料的な諸部分の対自的なこのような関係、実在する同一性として、しかも、**α)ただ観念的な止揚することとして、響き; β)凝集の実在的な止揚することとして、熱**」 (§ 292)。なお、第一版では、この B.「特殊な個性性」の内容は、C. INDIVIDUELLE PHYSIK. の a) DIE GESTALTE. の中に混在的にある。
 - 8) こうして、「重さからの自由が現前している」(E § 290 Zu.)こととなる。また、ここで、「相互外が、[...]自己内存在によって規定されている」(ebd.)。vgl. 註 5 auch. なお、§ 292 において、「響き」は「熱」と共に、「特殊な個性性」の第 3段階とされている。
 - 9) 「響き」は、物体が打たれることによって現象する自己内存在であるが、それは、光のように、自由となった空間と時間と言える。これは、さらに、「動物」の声として、その恣意に基づいて空間と時間を支配するものとなる(さらには言語として思惟の形式となる)。
 - 10) 響きは観念性であるが、このような相関においては、この観念性そのもの(主観性)は定立されていないし、媒語ともなっていない。響きは物体の総体性と諸元素の総体性との相関として現象することによってこの観念性を表現する。さらに、「響き」がこのような観念的な観念性、「凝集」の「ただ観念的な止揚すること」 (§ 292)であるのに対して、「熱」は「質料をその没形式性、その流動性へと自身を回復させること」 (§ 303)として、「凝集」の「実在的な止揚すること」 (§ 292)である。そして、相関両項の統一として「形態」が出現する。
 - 11) 「現実性」は、「(現象)において展開された」「内なるもの」と「外なるもの」との統一として登場する。
 - 12) 「自由な個性性」の展開、「形態」、「色」・「香り」・「味」・「電気」、「化学的過程」は、有機体において、形態化、同化、類的過程という3つの過程に対応するものである。これらは、個性性のふさわしいあり方での「顕示」である。しかし、これら3つは、「有機体」のように、統一されていない。
 - 13) 自然哲学の始めに展開されている点、線、面という空間の展開は、ここでのように、各所で登場する。
 - 14) ヘーゲルは、「凝集」と「電気」を区別し別の段階として論じているのではあるが、シェリングを引きながら両者を対応させている。

- 15) b. 「個体的物体の特殊化」は a)「光への関係」、β)「特殊な物体性における区別」、γ)「特殊な個性性における総体性;電気」と区分されている。なお、物理学の内部において、形態が A.「普遍的な個性性」(光、諸元素、元素過程)という個体化に対応しているように、この「個体的物体の特殊化」は、B.「特殊な個性性」(比重、凝集、響き、熱)という諸物理的特殊性に対応している。そして、後で述べるように、これは、また、有機体の同化の過程において、諸感覚(5感)や欲求、本能となるものである。
- 16) 磁気においては、その両極は、「まだ端的に主観[主体]の一方のもとで結ばれている」(E § 312 Zu. P1) にすぎず、「それらの対立はまだ自立性として現前していない」(ebd.)ものであり、単極のみでは存在しない。
- 17) vgl. E § 326 Zu. P2. 「磁気」と「電気」は、化学的過程の2つの側面であり、化学的過程がそれらの総体性である。光は、自身から自由に(対自的に)なった空間と時間であるが、この光が、今、化学的過程の中で磁気と電気において(物における定立として)実現している。電気、磁気、化学過程の同等性は、Oersted や Galvani からのものであろう(vgl. E § 324 Zu.)。
- 18) 化学的過程において、区別から同一性への過程と同一性から区別への過程がバラバラに定立されている。化学的過程は、物(物質と光との統一)を中心とした、結晶化であるか元素化であるかである。これらの統一は、かの「反省」の展開がその内的な必然性において定立されたことを意味する。これが概念である。
- 19) こうして、「概念が、それに対応する実在性において定立されている」 (§ 336) のであり、「有機体」は、主観性を持つ。化学的過程は生命ではないが、そこに主観性が舞い降りることによって有機体となる。有機体は、主観性の宿った「総体的な個性性」である。
- 20) この還帰は、同時に、(概念が本質と存在の統一であるように)光と空間の統一でもある。ここで、光は、それ自身が自身の媒体でもある自己媒介する波動=粒子として定立されている。こうして、主観性は、空間的なものとしての光と時間的なものとしての光の統一である。この空間と時間の光との統一、光の自己還帰において、(本来的有機体である)動物は、自覚的な光そのもの(自己感情)として、自身において、空間と時間を形成する。
- 21) 「生命あるものに概念が内在しているのだから、生命あるものの**合目的性は、内的なもの**として把握されるべきである; 概念は、生命あるものにおいて、規定された、その外面性から区別された、そして、その区別することにおいて外面性に浸透する、そして、自己同一的な概念としてある。生命あるもののこのような客観性は、**有機体**である」(GW12 A. DAS LEBENDIGE INDIVIDUUM. P5)
- 22) 「自然がその外面性からこの理念へと到達することによって、自然は、自身を越え出て行く。自然の帰結は、自身の始元としてはなく、そこにおいて自然が自分自身を止揚するところの自然の限界としてある。」(GW12 DAS LEBEN P2)
- 23) 自然哲学の始めに、「自然の理念は、[...] III. **主観性**の規定においてある。この規定においては、形式の**実在的な諸区別は、同様に、自分自身に見出されておりそして対自的にあるところの観念的な統一へと戻されている。有機学。**」 (§ 252) とされている。
- 24) vgl. 註 18. また、目的論においても、「概念は、自身をその主観性の他者へとせず、自身を客観化する」 (§ 204) が、このような「生命あるもの」は、自己目的としての目的論的なものである。なお、ヘーゲルは、力学、物理学、有機的物理学を、それぞれ、論理学「客観」において展開される、機械論、化学論、目的論に対応させている(E § 337 Zu. P2)。物理学の「化学的過程」におけるような化学論の統一と分裂の過程の全体が、目的論的過程である。
- 25) ただし、表題においては、A.「地質学的自然」(DIE GEOLOGISCHE NATUR.)、B.「植物的自然」(DIE VEGETABILISCHE NATUR.)、C.「動物有機体」(DER THIERISCHE ORGANISMUS.)と区分されている。これは、「動物有機体」が、本来的な「有機体」であることと関係あろう(但し第一版 HE § 262 では、「地質学的有機体」、「植物的自然」、「動物的自然」; 表題は第三版と同じ)。また、E § 337 の補遺では、「鉱物領域」、「植物領域」、「動物領域」ともされている。
- 26) これらは、主観性-空間-光、空間-光-主観性、光-主観性-空間と言ってもよいがえて有機体における推論図式で示した。これらが、「力学」においては、運動-空間-時間、空間-時間-運動、時間-運動-空間となっていたのは、小林[4]で示した通りである。
- 27) ヘーゲルは、E § 342 の補遺において、有機体における諸推論(個体化の過程、栄養摂取の過程、類の過程)を「3つの円環の総体性」として説明し、それぞれ、非有機的自然(特殊)-有機的なもの(個別)-類(普遍)、有機的なもの(個別)-類(普遍)-非有機的自然(特殊)、類(普遍)-非有機的自然(特殊)-有機的なもの(個別)とされている。ただし、そこでは、類、非有機的自然、有機的なものが、それぞれ、普遍、特殊、個別として固定されて諸推論が説明されている(本来はそれぞれの推論において異なって割り当てられるべき)。また、それぞれの推論の意味を考えると、ここで、「有機的なもの」(個別)は外面的な意味で使われ、また、「類」も単なる類であるむしろ種の意味で使用されている。そして、類の過程の媒語である非

- 有機的自然が本来の類であることは明らかである。従って、ヘーゲルがE § 342の補遺において示す諸図式は内容的には類(個)-個(特)-種(普)、個(普)-種(個)-類(特)、種(特)-類(普)-個(個)ということになる(ここで「個」は外面性の意味)。これは、本文で示した図式に一致するものである。
- 28) それぞれ、現存在の推論、反省の推論、必然性の推論である。また「3重の推論」については vgl. [2][3].
- 29) これは、「その概念を自身の外なる星的[siderisch]連関において、しかし、その特有な過程を前提された過去として持っているところの地球の死んでいる[todtliiegend]有機体」(§ 341)とも言われる。
- 30) ヘーゲルは、花崗岩の中に、概念の3性を見ている。
- 31) このような事情は植物的有機体の場合も同様であるが、植物的有機体では全過程の叙述がある。
- 32) vgl. § 337 u. § 345 auch. また、ゲーテは植物的諸形態を「葉」のその「変容」として見る。これは、植物が、有機体の第2段階として、「線」の展開、線から面(葉)への進行を目指すことに対応している。
- 33) 「根と葉への形態化することの区別化[Diremition]は、それ自身、地そして水への方向へと、光そして空気への方向への、水の吸収へと、葉と樹皮によっても光と空気によっても媒介された水の同化への区別化[Diremition]である」(§ 347)。また、「これらの諸個体に対して、唯一の全個体は、むしろ、ただ、諸分枝の主観的統一としての基盤[Boden]にすぎない[od. 諸分枝の主観的統一である以上に大地にすぎない];」(§ 343)。即ち、植物の諸分枝は、植物が大地に根ざして本来の個でないように、植物全体において完全に個ではない(vgl. E § 350 Zu. P1)。
- 34) 「細胞組織の点的な基礎あるいは最初の芽から、木質繊維の線的なものそして葉の面によって、植物は花と果実において丸の形態へと至った。諸葉の多重なものは自身を再び点へと集中する」(E § 347 Zu. P12)
- 35) 「植物が決して本来的に自己へと至ることができないとしても、花は、まさに、それ自身、このような還帰の契機、対自存在の契機である」(E § 347 Zu.)こと。
- 36) いわば、植物にとって、その内部と外部は転倒している。
- 37) 重さに捕らわれた時間が物質であり、それ故に物質的物体は落下するが、その解放が光である。
- 38) 光の展開は、自然全体の推論体系において、空間、時間、運動を契機として使うならば、空間-時間-運動という推論に対応している。
- 39) ヘーゲルは、§ 351において動物の「声」と「熱」そして「断続的な栄養摂取」についても述べている。「声」はE § 351 Zu.において「響き」との関連で述べられている。「響き」は打ち鳴らされることによってしか現象しないが、それが、「自由な自分自身において振動すること」、恣意的な「響き」として登場して来ている。これは、「現実的観念性(魂)として、時間と空間の抽象的観念性の支配」(§ 351)としての「自己運動」にも関連している。そして、動物は、「諸部分の凝集」と「自立的存立」とを持続的に解体するものとして、「熱」を持っている。有機体は、そもそも、持続的な化学的過程として登場したきたが(「形態」の持続する保持)、E § 351 Zu.においては、動物は、このような持続する化学的過程において熱を持っていると言われている。動物は、その自己保持において、「熱」における凝集と解体(溶解)をも支配しているのである。さらに、植物が連続的な「栄養摂取」しかを持っていないのに対して(§ 344)、動物は、「断続的な栄養摂取」を持っている。これは、動物が「個体的なもの」であるからである。
- 40) 「類は、ただ、交尾の過程において、その規定を充たし、そして、それが如何なるさらなる規定を持たない限り、それと共に死に近づくところの諸個体の没落によってのみ自身を保持する。」(GW20. §. 370) また、ヘーゲルは、「人間の有機体」を「完全な動物」と見なし(E § 352 Zu.)、それを「生命性の最も完全な有機体」、「最高の発展段階」とする(E § 368 Zu. P4)。そして、人間においては、その有機体は、「精神の道具」となっている(E § 368 Zu. P13)。
- 41) ヘーゲルにおいて自然と精神は単なる量的相違ではなく、その体系において、異なった総体性(世界)を形成する(小林[1],[2])。
- 42) 有機体の主観性が内在的であるにもかかわらず、精神との関係においてこのような状況にあるのは、「自然」の推論構造が、哲学体系の3重の推論において、「現存在の推論」に留まるからである。
- 43) あるいは外側から。いずれを内あるいは外とするのは観点による。
- 44) 光の無限進行は、光の体系をも重さの体系をも形成する。光の無限進行による太陽系の形成については、vgl. 小林[5]。また、「自然」は次のようにも表象できるだろう。(私たちが考察を始めた)光は、過去から未来への物質の流れと未来から過去への形相の流れの衝突点にあたる。この光が物質に反射されることによって個体的光の世界が形成され、同時に、物質的世界もその総体性を獲得する。これが物理学の領域における展開である。これらの両者の調和的統一、あるいは、総体性こそ有機体である。「有機体」というのは、このような光の円環に他ならない。これこそが、光を光として確証し、精神、本来的魂の領域へと通じて行くのである。
- 45) 所謂自殺ではなく、むしろ老衰(大往生)である。

主指導教員(佐藤徹郎教授) 副指導教員(井山弘幸教授・栗原隆教授)